

魔法瓶

泉鏡花作

一

峰は木の葉の虹である、谷は錦の淵である。

信濃の秋の山深く、霜に冴えた夕月の色を、まあ、

何と言はう。・・・・流は銀鱗の龍である。

鮮紅と、朱鷺と、桃色と、薄紅梅と、丹と、朱と、

くすんだ樺と、冴えた黄と、颯と点滴る濃い紅と、

紫の霧を山氣に漉して、玲瓏として映る、窓々は恰

も名にし負ふ田毎の月のやうな汽車の中から、はじ

め遠山の雲の薄衣の裾に、ちら／＼と白く、衝と冷

く光つて走り出した、其の水の色を遙に望んだ時は、

錦の衾を分けた仙宮の雪の兎と見た。

尾花も白い。尾上に遙に、崖に靡いて、堤防に残

り、稻束を縫つて、莖も葉も亂れ亂れて其は蕎麥よ

りも赤いのに、穂は夢のやうに白い幻にして然も、

日の名残か、月影か、晁々と艶を放つて、山の袖に、

懐に、錦に面影を留めた風情は、山嶽の色香に思を

砕いて、戀の棧橋を落ちた蒼空の雲の餘波のやうである。

空澄んで風のない日で、尾花は静として動かなかつたのに。

胡粉に分れた水の影は、朱を研ぐ薬研に水銀の轉ぶが如く、衝と流れて、すら／＼と絲を曳くのであつた。

汽車の進むに連れて、水の畝るのが知れた。・・  
濃き薄き、もみぢの中を、霧の隙を、次第に月の光が添つて、雲に吸はるゝが如く、眞蒼な空の下に常磐木の碧きがあれば、其處に、すつと浮立つて、音もなく玉散す。

窓もやゝ黄昏れて、村里の柿の實も軽くばら／＼と紅の林に紛れて、さま／＼のものゝ緑も黄色に、藁屋根の樺なるも赤い草に影が沈む、底澄む霧に艶を増して、露もこぼさず、霜も置かず、紅も笹色の粧を凝して、月光に溶けて二葉三葉、たゞ紅の点滴

る如く、峯を落ちつゝ、淵にも沈まず翻る。

散る、風なくして散る其もみぢ葉の影の消ゆるのは、棚田、山田、小田の彼方此方、砧の布のなごりを惜んで彷徨ふ状に、疊まれもせず、靡きも果てないで、力なげに、すら／＼と末廣がりに細く彳む夕の煙の中である。・・・煙の遠いのは人かと思ゆる、山の魂かと思ゆる、峰の妾かと思ゆる、狩り暮らし夕霧に薄く成り行く、里の美女の影かとも視めらるゝ。

水ある上には、横に渡つて橋となり、崖なす隈には、草を潜つて路となり、家ある軒には、斜めに繞つて暮行く秋の思と成る。

煙は静に、燃ゆる火の火先も宿さぬ。が、南天の實の溢れたやうに、ちら／＼と其の底に映るのは、雲の茜が、峰裏に夕日の影を投げたのである。

此の紅玉に入亂れて、小草に散つた眞珠の数は、次等々々照増る、月の田毎の影であつた。

やがて、月の世界と成れば、野に、畑に、山懐に、  
峰の裾に、遙に炭を焼く、それは雲に紛ふ、はた遠  
く筑摩川を挟んだ、兩岸に、すら／＼と立昇るそれ  
等の煙は、満山の冷き虹の錦の裏に、凝つて霜の階  
と成らう。凍てゝ水晶の圓き柱と成らう。

綿葉の蓑を着て、其の階、其の柱を攀ぢて、山々  
か、谷々の、姫は、上藹は、美しき鳥と成つて、月  
宮殿に遊ぶであらう。

木の葉は夜の虹である、月の錦の淵である。

此の峰、此の谷、恚る思。紅の梢を行く汽車さへ、  
轟きさへ、音なき煙の、雪なす瀧をさかのぼつて、  
軽い群青の雲に響く、幽なる、微妙なる音楽であつ  
た。驛員が黒く流れて、

「姨捨！姨捨！」

「失禮、此處は一體何處なんですか。」

「姨捨です。」

五分間停車と聞いて、昇降口を、峠の棧橋のやうな、雲に近い、夕月のしら／＼とあるブラツトフォームへ下りた一人旅の旅客が、恍惚とした顔をして訪ねた時、立會せた驛員は、  
 恚う答へた。が、  
 大方睡から覺めたものが、覺束なさに宿の名に念を入れたものと思つたらう。

「姨捨です。」

「成程。」と胸に氣を入れたやうに頷いて云つたが、汽車に揺られて來た聊かの疲労も交つて、山の美しさに魅せられて身の菱々と成つた、欺息のやうにも聞えた。

實際、彼は驛員の呼び聲に、疾く此の停車場の名は聞いて心得たので。空も山も、餘りの色彩に、我は果して何處にありや、と自ら疑つて尋ねたのであつた。

「何とも申しやうがありません。實にいゝ景色の處ですな。」

出入りの旅客も僅に二三。で、車室から降りたのは自分一人だった彼に、海拔二千尺の峰に於けるプラットフォームは、恰も雲の上に拵へた白き瑪瑙の棧敷であるが如く思はれたから、驛員に對する挨拶も、客が歓迎する主人に封して、感謝の意を表するが如きものであつた。

心は通ずる、驛員も、然も満足したらしい微笑を浮べて、

「お氣に入りました結構です、もみぢを御見物でございますか。」

と半ば得意の髭を揉む。

「否、見物と申すと、大分贅澤なやうで。」と、彼は何故か懐中の見える、餘り工面のよくない謙遜の仕方、

「氣紛れに御厄介を掛けますのです。しかし、觀光の客が一向に少いやうでございますな、此だけの處を。」

「はあ」と一寸時計を見ながら、

「雑と十日ばかり後れて居ますです。最う雪です  
からな。風によつては今夜にも眞白に成りますもの  
な。．．．尤も出盛りの旬だと云つても、月の  
頃ほどには来ないのでしてな。」

「あゝ、其の姨捨山と云ふのは孰れでございま  
す。」

「裏の此の山一體を然う云ふんださうです。」と  
来合せて立停つた、色の白い少年の驛夫が引取る。

手届く其の山懐に、蔽ひかさなる錦葉の蔭に、葉  
の眞赤な龍膽が、ふさ／＼と二三輪、霜に紫を擬し  
て咲く。．．．

途すがらも、此の神秘的な幽玄な花は、尾花の根、  
林の中、山の裂けた巖角に、軽く藍に成つたり、重  
く青く成つたり、故と淺黄だつたり、色が動きつゝ  
ある風情に、人に其の生命あることを知らせ顔に装  
つた。そして、下界に降りて、峰を、原を、紫の星  
が微行して幽に散歩する俤があつたのである。

「月見堂と云ひますのは。」

「彼處が其です。」

と、少年の驛夫が指す。

其の錦の淵に、霧を被けて尾花か縁とる、緋の毛  
氈を敷いた築島のやうな山の端に、もの珍しく一叢  
の緑の樹立。眞黄色な公孫樹が一本。篝火焚くか、  
と根が燃えて、眞紅の梢が、ちら／＼と夕の西をほ  
とばしらす。

道々は、峰にも、溪にも、然うした處に野社の鳥  
居が見えた。こゝには、銀の月一輪。

「空の色が潭のやうです、何と云つたら可いでせう。：碧とも淺黄とも薄い納戸とも、」  
 月が山々に曳いた其の薄衣を仰ぐ時、雲の棧橋に立つ思ひがした。

再び見た時計を納めて、

「あれへ御一泊は如何です。」

目の下の崖の樹の間に、山鳥が吐いた蜃氣樓の如き白壁造、屋根の石さへ群青の岩の斷片を葉に散らす。唯見ると、驛員は莞爾として、機關車の方へ、悠然として霧を渡つた。

「や、出ますな。」

衝と列車に入つた時、驛夫の少年は車の尾へ駈けて通る。笛は飴す、一鳥聲あり、汽車はする／＼と艶やかに動き出す。窓で、彼が帽を脱ぐのに、驛員は擧手して一揖した。霧が掠れて、ひた／＼と絡ひつく、霜かと思ふ冷さに、戸を引いたが、彼は其の硝子に面をひたと着けたまゝ、身動きもしないで尚ほ見惚れた。筑摩川は、あとに成り行く月見堂の山

の端の蔭から、月が投げたる網か見える 汽  
車の動くに連れて、山の峽、峰の谷戸が、田をかさ  
ね、畝をかさねて、小櫻、緋緘、萌黄匂、櫛匂を、  
青地、赤地、蜀紅など錦襪の直垂の上へ、草摺曳  
いて、さつく／＼と鎧ふが如く繰擴がつて、人の倅  
立昇る、遠近の夕煙は、紫籠めて裾濃に靡く。

水は金銀の縫目である。川中島さへ遙に思ふ。

「長野で辨當を買つた時に情なかつた。蓮に人參  
に臭い牛肉、肴と云ふのが生焼の鹽引の鮭は弱る。

稗澤山もそ／＼の、ぼんぼち飯、あゝ／＼旅  
行はしなれば可かつたと思つた。いや、贅釋は云  
ふまい、此の景色に封しては恐多いぞ。」

「伺ひます。」

「一停車場で、彼の隣に居た、黒地の質素な洋服を  
着て、半外套を被つて、鳥打を被つた山林局の官吏  
とも思ふ、痩せた陰気な男が、薄暗い窓から顔を出  
して、通がかりの驛員を呼んで聞いた。

「伊那へは、此の驛から何里ですな。」

「六里半、峠越しで、七里でせう。」

「しますと、次の驛からだど如何なものでせう。」

「然やう　おい／＼。」

呼ぶと、驛員が駈けて来た。まだ宵ながら靴の音が高く響く。改札口に人珍しげに此方を透かした山家の小児の乾栗のやうな顔の寂しさ。

「．．．．驛からだど伊那まで何里かね。」

「山路六里．．．．彼是七里でございます。」

「はゝあ、」と嘆息するやうに云つた時の、旅客の面色も四邊の光景も陰々たるものであつた。

「俾はありませうか。」

「ございます。」と驛夫が答へた。

「次の驛には、」

「多分ございませう、一臺ぐらゐは。」

「否、此處で下ります。」

と思沈んだのが、急に慌しげに云つて、

「此處で下ります。」

と、最う一度自ら確めるやうに言ひ加した。驛員

等は衝と兩方へ。

旅客は眉を壓する山又山に眉を蔽はれた状に、俯  
目に柵の荷を探り取つたが、笛の鳴る時、角形の革  
鞆に洋傘を持ち添へると、決然とした態度で、つか／  
＼と下りた。下り際に、顧みて彼に會釋した。健康  
を祈る。

四

隣となりに居あた其そのの旅客りよきやくは、何處どこから乗合のりあはせたのか彼かれはそれさへ知しらぬ。其そのの上うへ、雙方さうほうとも、もの思おもひに耽ふけつて、一度ひとも言葉ことばは交かはさなかつたのである。

雖然けれども、いざ、分わかれると成なれば、各自てんでが心寂こころさびしく、懷なつかしく、他人たにんのやうには思おもはなかつたほど列車れつしやの中なかは人稀ひとまれで、稀まれと云いふより、殆ほとんど誰たれも居あまないであつた。

彼かれは、單身山たんしんやま又山またやまを分わけて行ゆく新あたらしい知ち己きの前ぜん途とを思おもつた。蜀道しよくたう磽かうとして轉うたた世よは嶮けんなるかな。

孤驛こえき既すでに夜よるにして、里程りてい執つれよりするも峠たうげを隔へだて、七里しちりに餘あまる。……彼かれは其そのの道中だうちゆうの錦葉もみぢを思おもつた、霧きりの深ふかさを思おもつた、霜しもの鋭すみとさを思おもつた、寧むしろ其それよりも早はや雪ゆきを思おもつた、  
外套ぐわいたう黒くろく沈しづんで行ゆく。

月つきが晃きら々と窓まどを射いたので、  
然からりと玉たまの函はこを開ひらいた

やうに、山々谷々の錦葉の錦は、照々と輝を帯びて  
楓と目の前に又巻絹を解擡げた。が、末は仄々と薄  
く成り行く。渚の月に、美しき貝を敷いて、あの、  
すら／＼と細く立つ煙の、恰も鴉の白き影を岬に曳  
くが如く思はれたのは、記憶が返つたのである。

汽車は山の狭間の左右に迫る、暗き斷崖を穿つて  
過ぎるのであつた。

窓なる峰に、星を貫く、高き火の見の階子を見た。

孤家の灯の影ととも、落ちた木の葉の、幻に一葉  
紅の佛に立つばかりの明さへ無い。

岩を削つて点滴る水は、其の火の見階子に、垂々と  
霏して、立ちながら氷柱に成らむ、と冷かさの身  
に染むのみ。何處に家を焼く炎があらう。

暁の霜を裂き、夕暮の霧を分けて、山姫が撞木を  
當て、もみぢの紅を里に響かす、樹々の錦の知ら  
せ、と見れば、龍膽に似て俯向けに咲いた、半鐘の  
銅は、月に紫の影を照らす。

大なる蝙蝠のやうに、煙がむら／＼と隙間を潜つた。

「あゝ、隧道へ入つた。」

人も知つた……此の隧道は以ての外鎖がある。普通我國第一と稱へて、（代天工）と銘打つたと聞く、甲州笹子の隧道より、寧ろ此の方が長いかも知れぬ。はじめは、たゞあまりに通過ぎるつもりで、事とも爲なかつたばかりで無い。一向、此の變則の名所に就いて、知識も経験も無かつた彼は、次第に暗く成り、愈々深くなり、もの凄じく成つて、揺れ／＼轟然たる大音響を發して、汽車は天窓から鈍き錐と變じて、山の底に潜込むが如、易かたりぬものの氣勢に、少からず驚かされたのである。

「此は難所だ。」

美人に見惚るゝとて、あらう事か、ぐつたり鏡臺に凭掛つたと云ふ他愛なさ。で、腹掛に上り込んで、月の硝子窓に、骨を抜いて凍付いて居たのが、慌てゝ、向直つて、爪探りに下駄を捨て、外套の下で、ずるりと弛んだ帯を緊めると、襟を引掻合せる時、袂へ、這つて宙に留まつた、大切な路銀を、ト

懐中へ御直り候へと据直して、前褌をぐい、と緊めた。

「いや、なか／＼だぞ、尚だ。」

汽車は轟々と、唯瀧に捲かれた如くに響く。

此處で整然として腰を掛けて、外套の袖を合せて、一つ下腹で落着いた氣が、だらしもなく續けざまに噎せ返つた。煙が烈しい。

五

室内一面濛々とした上へ、あくどい黄味を帯びたのが、生暖い瀬を造つて、むく／＼泡を吹くやうに、  
・  
・  
・  
・  
獅噛面で切齒つた窓々の、隙間と云ふ隙間、天井、廂合から流込む。

噂も知らなかつた隧道が此だとすると、音に響いた笹子は可恐しい。一層中仙道を中央線で、名古屋へ大廻りしようかと思つたくらゐ。「何にしる酷いぞ、此は、……毒を以て毒を制すと遣れ。」

で袂から巻蓐を取つて、燐寸を摺つた。口の先に  
■と燃えた火で勢付いて、故と煙を深く吸つて、石炭臭いのを浚つて吹出す。

目もやゝ爽かに成つて、吻と呼吸をした時  
ふと、否、はじめてと言はう、――彼が掛け  
た斜に、向う側の腰掛に、畳まり積る霧の中に、落  
ちて落かさなつた美しい影を見た。

影ではない、色ある衣の媚かしいのを見たのである。

「女が居る。」

然も二人、……

と認めしたが、菱々として、両方が左右から、一人は一方の膝の上へ、一人は一方の、おくれ毛も亂れた肩へ、袖で面をひたと蔽うたまゝ、寄継り抱合ふやうに、俯伏しに成つて惱ましげである。

姿を、然うして撓やかに折重ねた、袖の色は、濃い萌黄である。深い紫である。いづれも上に被た羽織とは知れたが、縞目は分らぬ。言ふまでもなく紋かあらう。然し、煙に包まれて、朦朧としてそれは「み」えぬ。見

小袖も判然せぬ。が、二人とも紋縮緬と云ふのであらう、絞つた、染んだやうな斑点のある緋の長襦袢を着たのは確。で、搦み合つた四つの袖から、萌黄と其の紫とが彩を分けて、ハツにはら／＼と亂れながら、しつとりと縫れ合つて、裯紅に亂れし姿。

……

其の然も紅は、俯向いた襟をい迂り、凭れかゝつた衣紋に崩れて、膚も透く、とちらめくばかり、氣勢は沈んだが燃立つやう。

ト其の胸を、萌黄に溢れ、紫に垂れて、伊達巻であらう、一人は、鬱金の、一人は朱鷺色の、だらり結びが、ずらりと靡く。

「おや／＼女郎かな。」

雖然、襦袢ばかりに羽織を掛けて旅をすべき所説はない。……駈落と思ふ、が、頭巾も被らぬ。

顔を入違ひに、肩に前髪を伏せた方は、此方向きに、やゝ俯向くやうに紫の袖で蔽ふ、がつくりとしたれば、陰に成つて、髪の色は認められず。

其の女が上に坐つて、紫の女が、斜めになよ／＼と腰を掛けた。落した裳も、屈めた褌も、痛々しいまで亂れたのである。

年紀のころは云ふまでもない、上に襲ねた衣ばかり

りで、手足も同じ白さと見るまで、寸分違はぬ脊丈  
恰好。

・  
・  
・  
・  
と云ふ、其の脊丈恰好が？

「見世ものになる女ぢやないか。」  
 一度、然う思つたほど小さかつた。

が、いぢけたのでも縮んだのでもない。吹込む煙に惱亂した風情ながら、何處か水々として伸びやかに見える。襟元、肩附、褙はづれも尋常で見好げに釣合ふ。小さいと云ふより、……小造りに過ぎるのであつた。

汽車は倒に落ちて留まない。煙の濃いのが岩を崩して、泥を掻き／＼、波のやうな土を煽つて、七轉八倒あがき悶ゆる。

俗に、隧道の最も長いのも、ゆつくり吸つて敷島一本の間と聞く。

二本目を吸ひつけた時、彼は不安の念を禁じ得ないのであつた。……不思議な伴侶である。姿に色を凝らした、朦朧とした女の抱合つた影は、汽

車に事變のあるべき前兆ではないのであらうか。

嘗て此の隧道を穿ちし時、工夫が鶴嘴、爆裂彈の  
殘虐に掛つた、弱き樓主たちの幻ならずや。

或は此の室にのみ、場所と機會に因つて形を顯す、  
世に亡き人の怨靈ならずや。

と、誘はれた彼も、ぐら／＼と地震ふる墓の中に、  
一所に住んで居るものゝやうな思ひがして、をかし  
いばかり不安でならぬ。

静坐するに堪へなく成つて、急に衝と立つと、頭  
がふら／＼としてドンと尻もちをついて、一人で苦  
笑した。ふと大風が留んだやうに響が留んで、汽  
車の音は舊に復つた。

彼は慌しく窓を開いて、呼吸のありたけを口から  
吐出すが如くに月を仰ぐ、と澄切つた山の腰に、一  
幅のむら尾花を残して、室内の煙が透く。それが岩  
に浸込んで次第に消える。

夢から覺めた思ひで、厚ぼつたかつた顔を撫でた、其の掌を膝に支いて、氣も判然と向直つた時、彼は今までの想像の餘りな癡けさに又獨りで笑つた。

いや、知己でもない女の前で、獨笑は梟の業であらう。冥界の伴侶か、墓の相借家か、とまで怪しんだ二人の女が、別條なく、然も、揃つて美しい顔を上げて居たから。

「矢張り隧道に惱んだんだ。」  
と彼は頷いたのであつた。

「そして、踊……踊の歸送……恚う着崩した處を見ては、往路ではあるまい。踊子だらう。後の宿あたりに何か催しがあつて、其處へ呼ばれた、なにがし町の選ぬきとでも言ふのが、一つ先か、それとも次の驛へ歸るのであらう。……踊の催しと言へば、園遊會かなんぞで、灰色の手、黄色の手、樺色の手の、鼬、狐、狸、中には熊のやうなものも交つた大勢の手に、引廻され、掴立てられ、袖も振も亂れたまゝを汽車に乗つた落人らしい。」

落人おちうとと云いへば、踊をどつた番組ばんぐみも何なにか然さうした類たぐひかも  
知しれぬ。・・・其その紫むらさきの方ほうは、草束くさたばねの島田しまだと  
も見みえるが、房ふしなりした男鬚をとこまげに結ゆつて居ゐたから。

此この方ほうは、やゝ細面ほそおもてで。結綿ゆひわたの娘むすめは、ふつくりし  
て居ゐる。二人ふたりとも鬢かつらを被かぶつたかと思おもふ。年とし紀わかが少わい、  
十三四じゅうさんしよか、それとも五六ごろう、七八しちぱちか、皆みなに紅べにを入いれた  
らしいまで極彩ごくさい色しきに化粧けしやうしたが、烈はげしく疲つかれたと見み  
えて、恍惚うつつとりとして頬ほに蒼味あをみがさして、透すきとほ通とほるほど色いろ  
が白しろい。其その紅べにと思おもふ臉まぶたの紅くれなゐがなかつたら、小柄こがらで  
はあるし、たゞ動うごく人形にんぎやうに過すぎまい。

「何にしる弱つたらしい。．．．舞臺の帰途  
 として、今の隧道を越すのは、芝居の奈落を潜るや  
 うなものだ、いや、眞偶の奈落だつた。」

――心細さよ木曾路の旅は

笠に木の葉が舞ひかゝる――

人形のやうな此の女達、聲を聞きたい、錦葉に歌  
 ふ色鳥であらう。

まだ全く消え果てない煙を便宜に、あからめもし  
 ないで熟と視る時、女は二人、揃つて、目を瞠つて、  
 四ツの目をばつちりと瞬きした。．．．瞳は水  
 晶を張つたやうで、薄煙の室を透して透通るばかり、  
 月も射添ふ、と思ふと、紫も、萌黄も、袖の色がニ  
 と冴えて、姿の其處此處、燃立つ緋は、炎の亂るゝ  
 やうであつた。

すつかと立揚つた大漢子がある。

先に――七里半の峠を越さうとして下りた一  
見の知己が居た、椅子の間を向うへ隔てゝ、彼と同  
じ側の一隅に、薄青い天鵝絨の凭掛を枕にして、隧  
道を越す以前から、夜の底に沈んだやうに、煙に陰々  
として横倒れに寐て居たのが、此の時仁王立ちに成  
つたのである。

が、唐突に大な材木が化けて突立つて、手足の枝  
が生えたかと疑はるゝ。

茶の鳥打をづぼりと深く、身の丈を上から押込ん  
だ體に被つたのでさへ、見上げるばかり脊が高い。  
茶羅紗霜降の大外套を、風に向つた蓑よりも擴く裾  
一杯に着て、赤革の靴を穿いた。

時に斜違ひにづかりと通つて、二人の女の面前へ會  
釋もなくぬつくと立つ。ト紫の目が、ト其の外套の  
脇の下で、伏目に成つたは氣の毒らしい。――  
紅は萎む、萌黄のハツ口。

大漢子の兩手は、伸をして、天井を突抜く如く空

ざまに棚に掛る、と眞先に取つたのは、彈丸帶で、  
外套の腰へぎしりと締め、續いて銃を下ろして、ト  
筈高にガツしと掛けた。大な獲もの袋と、小革靴と  
一所に、片手掴みに引下したのは革紐の魔法鑢。

で、一揺り肩を揺つて、無雑作に、左右へ遣違へ  
に、ざくりと投掛ける、と腰でだぶりと動く。

獲もの袋が重さうに、然も發奮んで揺れた。

――山鳩七羽、田嶋十三、鶉十五羽、鴨が三羽――

づしりと其の中にあるが如くに見て取られる。

昨日、碓氷で汽車を下りて、峠の権現様に詣でた  
時、さしかゝりで俵を下りて、あとを案内に立つた  
車夫に、寂しい上坂で彼は訊ねた。

「些とも小鳥か居ないやうだな。」  
「搜すと居ります。……昨日も鐵砲打の旦

なに、私（わし）がへい、お供（とも）で、御案内（ごあんない）でへい、立派（りっぱ）に打（う）たせましたので。」

と狡（さか）しげな目（め）を光（ひか）らして云（い）つた。鳴（なき）も鳩（はと）も、――  
此處（こゝ）に其（そ）の獲（え）ものゝ數（かず）さへ思（おも）つたのは、車夫（しやふ）が其（そ）の時（とき）の言（こと）葉（ば）の記（き）憶（おく）である。

此（こ）の山（やま）里（さと）を、汽（き）車（しゃ）の中（なか）で、殆（ほとん）ど鳥（とり）の聲（こゑ）を聞（き）かなかつた彼（かれ）は、何（な）故（ぜ）か、谷（たに）筋（すぢ）にあらゆる小禽（せうきん）の類（るゐ）が、此（こ）の巨（おほ）きな手（て）の獵（かり）人（ひと）のた（た）めに狩（かり）盡（つく）されるやうな思（おも）ひして、何（なん）となく悚（そ）然（ぜん）せした。其（それ）も瞬（しゆん）時（じ）で。

汽（き）車（しゃ）は留（と）まつた。

「鹽（しほ）尻（じり）、鹽（しほ）尻（じり）――中央線（ちゆうあうせん）は乗換（のりかへ）。」

其（そ）の途（と）端（たん）である。鷹揚（おうやう）に、然（しか）も手（て）馴（な）れて、

迅（じん）速（そく）に結（け）束（そく）し果（は）てた紳士（しんし）は、其（そ）の爲（ため）に空（むな）しく待（まち）構（かま）へて居（あ）たらしい兩手（りやうて）にづかりと左（ひだり）右（みぎ）、其（そ）の二（ふた）人（たり）の女（をんな）の、頸（えり）上（がみ）と思（おも）ふあたりを無手（むず）と掴（つか）んで引（ひ）つたてる、と、呀（や）？  
衣（きぬ）も扱（し）帯（おび）も上（うへ）へ摺（す）つて、するりと白（しろ）い顔（かほ）が襟（えり）に埋（うま）つた、紫（むらさき）と萌（も）黄（ぎ）の、緋（ひ）を流（なが）るゝやうに宙（ちゆう）に掛（か）けて、紳士（しんし）は大跨（おほまた）にづかり／＼。

呆氣あつけに取とられた彼かれを一人室内ひとりしつないに残のこして、悠然いうぜんと扉とびらを出でたのである。

あとの、もの凄すごさ。

紅べにさいた二ふたツの愛あい々くちびるしい唇くちびるが、凍いて、櫻さくら貝がひの散ちつて音おとするばかり、月つきにちら／＼と、それ、彼あすこ處こに此こ處こに――

「あゝ、寒さむい。」

温をん泉せんに行ゆかうとして、菊きく屋やの廣どてら袖そでに着き換かへるに附つけても、途とちう中ちゆうの胸どうぶる震ふるひの留とまらなかつたまで、彼かれは少すくなからず怯おびかされたのである。

東とう京きやうを出た程ちゆうつ時ときから、諏す訪はに一ぱく泊ぱくと豫よ定ていして、旅はた籠こ屋やは志しした町まち通どほりの其その菊きく屋やであつた。

心こころ細こい事ことには、鹽しほ尻じりでも、一ひとり人も同おなじ室しつへ乗のり込こまなかつた。……其その宿しゆくの名なは、八や重へ垣が姫ひめと、随ずい筆ひつの名なで、餘よ所そながら、未み見けんの知ち己き。初しよ對たい面めんの從い姉と妹こと、伯お父ちさんぐらゐに思おもつて居ゐたのに。

下しも諏す訪はへ來くると、七しち八はち人にん、田た螺にしを好すきさうな、然しかも娑しや婆は氣けな商あ人きん風ふうの身みを光ひからして、ばら／＼と入はいつて來きた。其その中なかで一ひとり人にん、あゝ、其その女をんな二ふた人にん居ゐた處ところ

へ、澄まして腰を掛けた男があつた。

はつと思つたが、一向平氣で、甲府か飯田町へ乗越すらしい。上諏訪に彼が下車した時まで、別に何事もなく、草にも樹にも成らず、酒のみと見えて、鼻の尖の赤いのが、其のまゝ柿の實にも成らないのを寧ろ怪む。

はじめ、もう其のあたりから、山も野も眇として諏訪の湖の水と成る由、聞いては居たが、ふと心着かずに過ぎた、――氣にして、女の後ばかり視めて居たので。

改札口を冷く出ると、四邊は山の陰に、澄渡つた湖を包んで、月に照返さるゝ爲か、漆の如く艶やかに、黒く、且つ玲瓏として透通る。

白きは町家の屋根であつた。

水から湧いた影のやうに、すら／＼と黒く燦つて、俾が三臺、つい目の前から駈出した。

「一俵が三臺、人が三人」

「待てよ、先刻の紳士は、あゝして鹽尻で下車たと思ふが、……其とも室を替へて此處まで来たか、俵が三臺、揃つて。」

と見る、目の前へ、黄色い提灯の灯が流れて、がたりと青く塗つた函車を曳出すものあり。提灯には赤い葎で、車には白い紋で、菊屋の店に相違ない。

「一寸、茶屋の迎かい。」

「然うで。」

とぶつきら棒立。仲屋の小僧と云ふ身の、から脛の、のツぼが答へる。

「おい、其處へ行くんだ、俵はないかね。」

「今ので出拂つたで、」

「出拂つた 然うか。 餘程あるかい。」

「何、ぢき其處だよ。旦那、毛布預るか。」

縞の膝掛を函に載せて、

「荷もつも寄越すが可いよ。」

「追剥のやうだな。」

と思はず笑つたが、これは分らなかつた。奴はけろりとして、冷いか、日和下駄をかた／＼と高足に踏鳴らす。

「おい来た。」

と出さうとした信玄袋は、顧みるに餘りに軽い。函に載せると、ボンと飛出しさうであるから遠慮した。

「これは可いよ。」

「然うかね、では、早く來させいよ。寒いから。」

ありや、と威勢よく頭突に屈んで、鼻息をふツと吹き、一散に黒く成つてがら／＼と月夜を駆出す。

猪が飛出したやうに又驚いて、彼は廣い辻に一人立つて、店々の電燈の數より多い、大屋根の石の蒼白い數を見た。

——紙張の立看板に、（浮世の波。）新派劇とあるのを見た。其の浮世の波に、流れ寄つた枯枝であらう。非ず、湖のふゆを彩る、紅の二葉三葉。

「酒を頼むよ、何しろ、……熱くして。」  
 菊屋に着いて、一室に通されると、まだ坐りもしない前、外套を脱ぎながら、案内の女中に注文したのは、此の男が、素人了簡の回生劑であつた。

其のまゝ、六疊の眞中の卓子臺の前に、二と坐ると、早や目前にちらつく、濃き薄き、染色の葉に酔へるが如く、額を壓へて、ぐつたりと成つて、二度目に火鉢を持つて來たのを、誰とも知らず、はじめから其處に火を装つて備附けられたものゝやうに、無意識に煙草を吸つた。

細い煙も峰に靡く。

「お召しかへなさいまして、お湯へ入らつしやいまし。」

「然うだ、飛込まう。」  
 と糊の新しい浴衣に着換へて――件の胴宸ひをしながら――廊下へ出た。が、する／＼と向うへ、帳場の方へ、遙に駈けて行く女中を見ながら、

彼は欄干に立つて猶豫つたのである。

湯氣が温く、目の下なる湯殿の窓明に、錦葉を映すが如く色づいて、むくりと此の二階の軒を掠めて、中庭の池らしい、さら／＼と鳴る水の音に揺れかゝるから、内湯の在所は聞かないでも分る。

が、通された部屋は、すぐ突當りが壁で、其處から下りる裏階子の口は見えない。で、滲殿へ大廻りしないと行かれぬ。

處で、はじめ女中に案内されて通つた時から、「此處では酔へないぞ。」と心で叫んだ、此の高位のに、別に階子檀と云ふほどのものも無し、廊下を一廻りして、向うへ下るあたりが、可なりな勾配。低い太鼓橋を渡るくらゐ、拭込んだ板敷が然もつるりと、にる。

彼は木曾の棧橋を、旅店の、部屋々々の障子、歩板の壁に添つて渡つて來た……其も風情である。

雖然、心覺えで足許の覺束なさに、寒ければとて、三尺を前結びに唯解くばかりにしたればとて、ばた／＼駈出すなど思ひも寄らない。

且つは暗い。．．．前途下りに、見込んで、其の勾配の最も著しい其處から、母屋の正面の低い縁側に成る壁に、薄明りの掛行燈か有るばかり。他は、自分のと一間拭いて高樓の一方の、隅の部屋に客がある、其處の障子に電燈の影さすのみ。

「此は、そろり／＼と參らう。」

獨りで苦笑ひして、追上つた橋掛りを鍊るやうに、谿川に臨むが如く、池の周圍を欄干づたひ。

他の客の前をなぞへに折曲つて、だら／＼下りの廊下へ掛ると、舊來た釣橋の下に、磨硝子の湯殿が底のやうに見えて、而して、足許が急に暗く成つた。

ト何處へ響いて、何に通ふか、辿々しく一步二歩移すに連れて、キリ／＼キリ／＼と微に廊下の板が鳴る。

ちよろ／＼とだけの流ながら、堤防も控へず地續  
きに、諏訪湖を一つ控へたれば、爪下へ大湖の水、  
鎬をせめて、矢をはいで、じり／＼と迫るが如く思  
はるゝ。．．．．其の音さへ、途留むか、と耳に  
響いて、キリ／＼と細く透る。．．．．

奥山家の一軒家に、たをやかな女が居て、白雪の  
糸を谷に繰り引く糸車の音かと思ふ。．．．．床  
しく、懐しく、美しく、心細く、且つ凄い。

ト又聞える。

(きり／＼、きり／＼

きいこ、きいこ。)

彼は引据ゑられるやうに立つた。

古の本陣と云ふ構への大きな建ものは、寂然として居る。

客は他にない。

湯に行つた留守か、もの越、氣勢もしないが、停車場から俾で走らした三人の客、其の三人が其處に、と思つて、深く注意した、——今は背後に成つた——取着きの電燈を裡に閉切つた、障子の前へ、……翼を搔込んだ、地を渡る鳥の影が黒く映つた。

小形な鳩ほどある、

唯見ると、する／＼と動く。障子はづれに消えたと思ふと、きり／＼と板に鳴つて、つる／＼と、こつて、はつと思ふ袂の下を、悚然と胸を冷うさして通抜けた。が、颯と、翠に、藍を襲ね、群青を籠めて、紫に成つて、つい、其の掛行燈の前を抜けた。

が、眞赤な嘴口を明けた。

萌黄色の首かする／＼と伸びて、車が軋つて、

(きり／＼、きり／＼。

きいこ、きつこ、きいこ。)

(樹へ行こ、樹へ行こ。

樹樵来るな、樹樵来るな。きいこ、きい

こ。)

と鳴いた。

あゝ、あの、手遊びの青首の鴨だ、と見ると、續いて、追ひ状に袖の下を抜けたのは、緋に黄色に、艶々とした鴛鴦である。ともに、勾配にすら／＼と、水に流るゝ、廊下を迂る。

「何處かへ絲を引掛けた。」

廣袖へ着けて女中が、と、はた／＼と袖を煽つたが、フト鳥に成るやうに思つて、暗がりて悚然とした。

第一、身に着いた絲の、玩弄具の鳥が、イんだものを、向うへ通抜ける数はない。

手を締めて、差窺ふ、母屋の、遠く幽なやうな帳場から、明の末が茫と届く。池に面した大廣間、中は四五十疊と思はるゝ、薄暗い障子の数の真中あたり。合せ目を細目に開けて、其處に立つて、背後に、月の影さへ届かぬ、山又山の谷々を、蜘蛛の圍の如く控へた、星に届く黒き洞穴の如き大なる暗闇を翼に擴げて、姿は細き障子の立棧。

温泉の煙に、ほんのりと、雪なす顔、黒髪の鬘。

幻の裳に月影さすよと、爪先白く立つたのが、花の魂のやうな手を上げて、ちらりと招く。

きり／＼と、鳥の形は柱を繞つた。

其の女は　　

―― 此に就いて、別に物語があるのである。

【完】